

# 19世紀後半の子ども服に見られるSailor Suitの流行

## The Fashion of “Sailor Suits” Evident in Late 19th Century Children’s Clothes

大枝 近子  
(Ooeda Chikako)

### Abstract :

“Sailor suits” were popular as children’s clothes from the late 19th century through to the early 20th century. I have attempted to throw light on the main factors underlying the popularity of this style of clothing with reference to an article that appeared in the women’s magazine *The Queen*, published in Britain in 1861.

I discovered the following factors as a result:

- 1) Sailor suits were popular because they hung loose on children’s bodies and did not hem them in, reflecting the desire for children to grow up with sound and healthy bodies.
- 2) Amidst the strong orientation towards cleanliness at the time, sailor suits proved popular as everyday wear because the material could be washed.
- 3) Because they did not fit particularly close to the body, sailor suits were easy to buy the ready-made, and, for the same reason, they could be easily made by housewives once the stencils had been obtained.

Having gained popularity on account of these factors, sailor suits came to exert a considerable influence on the emergence of simple, functional children’s wear, the foundations for which were at last laid towards the end of the 19th century.

キーワード：セーラー服、子ども服、クイーン誌

Key Word : Sailor Suit, children’s clothes, *The Queen*

### 1はじめに

イギリス海軍で水兵が着用していた衣服が起源とされるSailor Suitが子ども服に採用され、流行したのは18世紀後半である。それが19世紀に入り、1846年にヴィクトリア女王がアイルランドを訪問した際、当時5歳の皇太子にこれを着用させ、その姿がたいへんかわいらしかったことからSailor Suitが再び流行する。このときの皇太子の姿は宮廷画家ヴィンター・ハルターが描いた肖像画（1851年）にも残っている。こ

れをきっかけに当時の最強の海軍力を投影したSailor Suitは世界中に波及し、この流行は20世紀初頭まで続いた。

このように19世紀後半の長い間子どもたちの間でSailor Suitが大流行したことは、カニングトンをはじめ多くの研究者により指摘されているが、その流行の要因については先行研究がほとんど見られない。そこで、1861年にイギリスで創刊された女性雑誌『*The Queen*』を手がかりにその流行の要因を探った。

『The Queen』誌はサミュエル・ビートン (Samuel Beaton, 1883-77) がヴィクトリア時代のミドル・クラスの女性を対象に編集した、社交界や宮廷の話題から家庭生活全般にわたる多彩な記事や読み物が掲載された婦人の総合雑誌である。

## 2 再流行

ブーシェはその著書の中で「1775年以降になるとSailor Suitを着た少年たちの肖像画が見られる。」<sup>①</sup>とし、18世紀後半にはすでに少年たちがSailor Suitを着用していたことを示唆しているが、1864年11月19日の記事にはそれが再び流行していることが記されている。

Sailor's Dressが小さな少年に再び流行している。

少年たちは膝の下で絞られたたっぷりしたニッカボッカーズに幅広の短いセーラーカラーのジャケットを着用している。

そして、1888年6月23日の記事には少年たちがSailor Suitを着用するのは新しいことではなく、50年前にも着られていたスタイルであることが指摘されている。

イギリス海軍でSailor Suitが制服として規定されたのは1857年であるが、それ以前からほぼ同様のスタイルの服装を水兵がしており、それ

らを子ども服に取り入れていたということであろう。それが前述したように皇太子が着用することにより、多くの人々の目に触れ、60年代以降大流行したと考えられる。(図1)

ブーシェも「これほど長い期間にわたって流行をほしいままにした子ども服の流行は、他にほとんど見当たらない。」<sup>②</sup>と述べている。

Sailor Suitが子どもたちの間で長く流行したことはさまざまな形態上のバリエーションが生まれていること、そしてさまざまな名称が付けられていることから伺われる。名称に関しては、記事の中に出てくるだけでも「Sailor Dress」「Man-o'-War Dress(Suit, Costume)」「Navy Costume(Suit)」「Middy Suit」「Sailor Kilt」「Royal Navy Suit」「Jack Tar Suit」などがあげられる。当時のイギリス海軍の名声と威信を表現しているSailor Suitは親にとっても子供にとっても好感のもてる衣服であったと考えられる。

## 3 少年用・少女用・婦人用 Sailor Suit

以上のように当初は少年用として着用されたSailor Suitであったが、1879年10月18日の記事には少女がSailor Suitを着ている様子が描かれており、次のように記されている。



図1 少年用Sailor Suit (1879年1月11日)



図2 少女用Sailor Suit (1879年10月18日)

ズボンの代わりにスカートを用いる以外は少年用に似ている。

ボートやヨットなど浜辺での遊び着に適している。(図2)

80年代後半の洋装店の広告には少年用、少女用ともにSailor Suitの広告が増え、1887年2月26日のピーター・ロビンソン店の広告には

3歳の男の子はSailor Kiltを着る。それはペチコートがなくした女の子のSailor Dressと同じである。

と述べられている。当時、6歳くらいまでは男の子も女の子とほぼ同じワンピース形式の服装をしていたことはさまざまな資料から明らかになっているが、ワンピース形式ではなくブラウスとスカートの二部形式のSailor Suitも男児、女児を問わず着用されていたことがわかる。

さらに広告文には

幼児服とニッカボッカーズとの間の年齢の少年に適している。

とも書かれており、ワンピース形式の幼児服の次に着るものとして推奨している。つまり、男の子はワンピース形式の幼児服ののち、セーラーブラウスをスカートと合わせた二部形式のSailor Kilt、それからニッカボッカーズと合わせ、さらに年長になると、長ズボンと合わせて着ていたことがわかる。少年がスカートではなく、ズボンと組み合わせたSailor Suitを着る年齢はおおよそ4歳から10歳までであったことも広告から知ることができる。

こうした子ども服から流行したSailor Suitであるが、これらはおとなの婦人にも採用されていた。『The Queen』誌に婦人用Sailor Suitがもっとも早く現れるのは1867年7月27日の記事であり、そこにはボート遊び用ドレスとして紹介されている。また、ヨット遊び用のドレスや水着、海辺へ出かける旅行着として、さらには80年代後半になるとテニスやクリケット、銃猟、サイクリング等のスポーツをする際に着用され、次第に一般の服飾としてSailor Suitが定着していった様子が伺われる。

これは明らかに子ども服からの影響が考えられる。親子で揃いのSailor Suitを着て海辺でバカンスを楽しむ様子(1894年9月8日)やセー

ラーカラーの水着で海水浴をする姿(1884年6月28日)も記事の中に見受けられ、ヴィクトリア時代のマイホーム主義的な考え方が衣服に反映されている。

#### 4 多岐にわたる用途

このように子どものSailor Suitは海軍の制服を模したものであるため、当初はボートやヨット、浜辺での遊びに着用されていたようであるが、次第に正装としても用いられるようになったことが次の記事から伺える。

Sailor Dressは黒いベルベットで作るとたいへんエレガントである。房飾りをしたり、アストラカンの毛で縁取りされることもある。(1864年11月19日)

白いシャツはたいへんスタイリッシュなので、紺サージのスカートや長ズボン、ニッカボッカーズと合わせると、夜の装いにもなる。(1887年1月29日)(図3)

**MAN O' WAR SUITS**  
FOR FANCY DRESS OR EVENING WEAR.

JOHN REDFERN AND SONS are now making Blouses of White Serge or Flannel Cloth, to be worn with their Man o' War Suits. They usually have a gold or silver badge on arm, and are braided down the front and on the collar, either with silver, gold, or narrow blue Russian braid, the deep sailor collar being made from dark blue or any other coloured serge desired.

These White Shirts have an extremely stylish and pretty effect for evening wear when worn with the Navy Serge Skirts, Trousers, or Knickerbockers, and being made from the best materials, carefully chosen and shrunk, may be washed with safety.

Patterns, Sketches, Measurement Forms, and full particulars on application to

**JOHN REDFERN & SONS, COWES, I.W.**

図3 レドファン店の広告  
(1887年1月29日)

実際に1894年12月22日の記事にはベルベット製のSailor Suitの広告も見られる。

1894年10月27日の記事にはドイツの皇后と4人の子どもの写真が掲載されているが、乳児を除く4歳(女)、6歳(男)、7歳(男)の3人の子どものはいずれもSailor Suitを着ている。また、同年11月10日のロシアの皇室一家の家族写真も、公爵である息子二人がSailor Suitを着用しており、家族写真という正式な場でSailor

Suitが用いられていたことがわかる。

以上のように子ども用のSailor Suitは日常の遊び着としてだけでなく、正装時にも着用されており、これは婦人用のSailor Suitと大きく異なる点である。婦人用のそれは当初は子どもと同じように水辺をイメージさせる川や海などで着用されていたが、次第にテニスや銃獵、サイクリングなどのスポーツをする際に着用されるようになり、日常着として定着する。しかし、それが正装用として用いられることはなかった。

## 5 機能的な子ども服

ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712-1775) がその著書「エミール」の中で「成長中の四肢はすべて、衣服の中でゆったりとさせなくてはならない。」<sup>(3)</sup> とし、身体を締め付けるものすべてを排除しなくてはならないと説いたのは18世紀後半である。こうしたルソーの考えに影響を受けた小児科医のストゥルーヴ博士もスワドリリングをはじめとするあらゆる身体上の拘束から子ども達を自由にしなければならないと考え、乳幼児の身体発達の健全な方法を述べた子育て書を18世紀末に著している。それによると、どんなものであれきつく縛ることと固定して支えることは野蛮なことであり、不自然なことであると、一部分を露出したり逆に過度に覆うことも病気になりやすいと警告した。このように18世紀後半になると、多くのヒューマニストや教育者、医者らにより新しい児童観が提唱されるようになり、その中で子どもの発育を阻害する衣服への警告がなされた。<sup>(4)</sup>

19世紀になると、こうした考え方が徐々に行きわたる事になる。1879年1月11日の記事には次のように記されている。

日々の生活でおとなだけではなく、乳幼児や子どもの健康が多かれ少なかれ害されている。衣服の素材、色、肌ざわり、量などを季節や天気によって調節することが大切である。スワドリリングや紐で締め付けることや硬くて長いペチコートは健康を害する。身体をむき出しにすることも良くない。

この記事はかなり反響があり、次々に読者からの質問が寄せられている。どのような服装をさせればよいのか、形や素材を問うものが何週にもわたり掲載されている。

また、1894年8月4日の記事にも次のように述べられている。

子どもたちがおとなと同じようにパニエをつけてウエストの細さを自慢したり、シンプルな素材を軽蔑したりする時代は終わった。

そこで、抜け目のない洋装店は次のような広告を1888年4月14日に出している。

Sailor Suitは英国では子どもにとって最も健康的なドレスとして医師が推奨している。手足が自由になり、子どもの発達に良い。

Sailor Suitはゆとりがあり、自由に身動きができるため、子どもの健康を損なうことがないので子ども服として適しているということである。Sailor Suitが動きやすいということは、婦人のスポーツ服に取り入れられたことから明らかである。テニス用Sailor Suitについて1879年2月22日には以下のような説明がされている。

テニスの上手な人はできる限り動きやすくゆったりとしたブラウスとスカートを着用する。タイトなボディースや後ろで結んだスカートは着ない。

また、1884年3月29日のレドファン店のセーラーカラーのテニスブラウスの広告記事も機能性を強調したものになっている。

このブラウスは胸に十分なゆとりがあるためラケットをもつ腕が自由に動く。

カニングトンもセーラーカラーのテニスコスチュームを80年代の流行として取り上げ、その機能性に着目している。<sup>(5)</sup>

## 6 清潔な子ども服

次に、Sailor Suitが子ども服に適している理由として「清潔」が挙げられる。この頃「Hygienic」や「Healthy」、「Sanitary」といった言葉が記事の至るところに見られる。当時の衛生状態は決して良いものとは言えなかったが、徐々に人々の中に「清潔」への意識が芽生えてきた

時期である。特に子どもの身体へのまなごしとして、先の「機能性」と「清潔」が話題になるようになってきた。

前述した1888年4月14日の記事にはSailor Suitは身体を締め付けなくて良いということに続けて、

しかも、この衣服は洗うことができるので、清潔である。

とあり、1888年4月21日には

若い母親たちにとって、洗える素材ということが子どもの衣服を選ぶ大きな要因になっている。

と記されている。この頃から子ども服の広告にも「Blue Stripe Washing Suits」「White Drill Washing Suits」など「Washing」という言葉が目につくようになる。洗うことができるということが宣伝のひとつになっていることは明らかである。1888年6月16日のジェームス・スペンス店の広告には「Washing Dress Department」であることが大々的にうたわれている。そこにはストライプとチェックのゼファー（主に女性用に用いられる薄地で軽い織物）やさまざまな種類の綿布が値段とともに掲載されている。また、1889年7月13日のミッドランド・マニュファクチュアリング社の広告ではドリル（太綾の織物）でできた「Man-o'-War Suits」は丈夫で涼しく簡単に洗う事ができると宣伝している。

先に述べたように子ども服としてのSailor Suitは用途が多岐にわたるため、TPOに合わせて素材もさまざまである。日常着として最も一般的なものはサージやドリル、ガラティーアといった綿や毛の綾織物、また襟元から見えている中に着る肌着はフランネルなどの柔らかい毛織物であったことが記事から伺える。綿はもちろんのこと、毛織物も自宅で洗う事ができることは1884年4月5日の次の記事のほかにも多数の記事から知ることができる。

フランネル製のテニス用ドレスほど良いものはない。それらは注意して洗えば上手に洗うことができる。

Sailor Suitに関しても読者からの質問に対する答えとして編集者が次のようにコメントしている。

小さい少年が青いサージに赤や白などのフランネルの襟とカフスのついたSailor Suitを着ている姿を見かけるが、それらは何度も洗うことができる。(1879年10月18日)

清潔な衣服を子どもに着用させるという考え方が徐々に浸透してきたことが伺われる。

## 7 既製服の発達と型紙の普及

19世紀後半のこの時期は衣服産業の機械化により既製服が出回り始め、安価な衣服が大量に生産されはじめた。

1888年4月14日のレドファン店の広告には「Tailor-Made Man o' War Suits」と大きな文字で書かれており、既製服ではなく注文服であることを強調している。(図4) さらに、1890年



図4 レドファン店の広告  
(1888年4月14日)

5月3日の同店の広告にはSailor Suitの少年が大きく描かれ、次のようなコメントが載っている。

少年、少女のためのMan-o'-War Suit.

本当の海軍の制服と同じサージとドリル生地できている。

これらは既製服ではなく、経験を積んだ職人によりそれぞれに合うように注意深くカットされ、作られる。そのため確実にフィットする。

今や大々的に広告されている既製服は信頼することはできない。

このような広告からも、当時Sailor Suitが品質に関しては問題は多かったものの既製服としてかなり普及しはじめていたことが伺われる。

その理由はSailor Suitの形態にあったと思わ

れる。先に述べたようにさほど身体にフィットする必要のない形であったためである。既製の発達過程を見ていくと、紳士服は軍服をはじめとして身体にさほど緊密に沿う必要がなかったために普及しやすかったが、当時の女性の衣服はクリノリドレスにしてもバスルドレスにしても身体にフィットする必要があったために、既製服にはなかなか得なかったという事情がある。そうしたことから考えて、このSailor Suitはスポーツにも適するくらいのゆとりがあり、既製服にはなりやすかったことは容易に想像できる。

大量生産された安価なSailor Suitが大量に売られ、庶民にとっても手の届くものになったのである。

一方、この頃既製服だけではなく、型紙が販売されるようにもなる。1863年、マサチューセッツ州スターリングで、仕立屋であったバタリック(Ebenezer Butterick)は妻(ellen Butterick)のデザインによる型紙を製作した。当初、ダンボールで作られた型紙を薄葉紙(tissue paper)で製作することにより折りたたむことができるようになり、アメリカのどこへでも発送することが可能となった。1864年にニューヨークでバタリック社(E. Butterick & Company)を設立し、紳士用、少年用、そして1866年には婦人用の型紙を販売し、1876年までにアメリカとカナダに100の事務所と1000店以上の型紙販売店を構えるまでになった。また、パリ、ロンドン、ヴェニス、ベルリンにも進出し、『Ladies Quarterly of Broadway Fashions』など型紙を掲載する雑誌も出版するようになる。

図5は1882年夏用のカタログである。少年用と子ども用のSailor Costumeの前後のデザイン画が描かれ、その下には申し込み番号、発行年、名称、サイズ、適した年齢、値段が記されている。

こうしたバタリック・パターンと言われるものの他にも、その後次々にパターンが開発され、それらを見ても、子ども用のSailor Costumeの型紙が当時数多く販売されていたことがわかる。

型紙の発明と同じ頃実用的なミシンも普及す

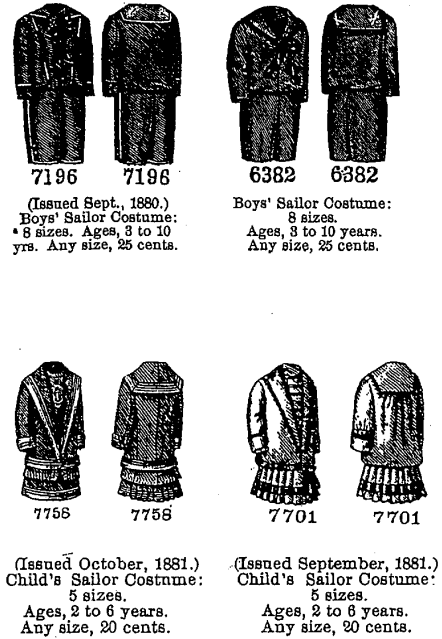


図5 バタリック社のカタログ  
(1882年夏)

る。19世紀の半ばにボストンのエリアス・ハウが2本糸で縫合する現在のミシンの原型になるような機械を発明し、1851年アイザック・M・シンガーがそれに改良をほどこした足踏みミシンを売り出して、会社を設立する。このシンガー社は自社販売網を持っていたり、分割払いを可能にしたりと斬新な販売方法でアメリカ本土だけではなく、ヨーロッパ諸国にまでミシンを浸透させた。

シンガー社は当初から業務用とともに家庭用のミシンの販売にも力を入れていたと言われ、人々は型紙を手に入れ、ミシンを使って家庭で衣服を縫う事ができるようになったのである。

Sailor Suitも母親の手により子どものために製作されたものと思われる。

## 8 まとめ

『The Queen』誌の記事を手がかりに、19世紀後半から20世紀はじめにかけて子どもたちの間で着用されたSailor Suitの流行の要因を探った。

その結果、第一に子どもたちの身体の健全な発達を願うようになったことからゆったりとした身体を締め付けないSailor Suitが好まれたこと、第二に当時の清潔志向の中で、日常着とし

て着用されたSailor Suitの素材が洗うことができたこと、第三にさほど身体に沿わせる必要のなかった形態であったため既制服になりやすかったこと、また同じ理由から家庭の主婦でも型紙を手に入れば製作可能であったことが見出された。

機能的で清潔なSailor Suitが注文服だけではなく、既制服や家庭でのドレスメーカーで手に入るようになり、階級を超えて多くの子どもたちに着用されるようになったのである。そして、こうしたSailor Suitの流行は19世紀末になってやっとその基礎ができ上がるシンプルで機能的な子どものための子ども服成立に少なからず影響を及ぼしたと思われる。

#### <参考文献>

1. Boucher,F.,*Histoire du Costume*, Flammarion,Paris,1965,p.313
2. 同上、p.404
3. J.J.Rousseau「エミール」樋口謹一訳、泉社、1980、p.157
4. Anita Schorsch「絵で読む子どもの社会史」北本正章訳、新曜社、1992、p.60
5. Phillis Cunnington & Alan Mansfield,*English Coutume for Sports and Outdoor Recreation*, Barnes & Noble,1969,p.91